みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Possibilities of the Ethnography by the Postsoviet anthropologists : Imagined nationality and ethnicity in nationalism : On the Qaraqalpaq intellectual Däwqaraev

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂井, 弘紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001253

高倉浩樹・佐々木史郎編『ポスト社会主義人類学の射程』
国立民族学博物館調査報告　78:289-307(2008)

カラカルパクの知識人ダウカラエフについて

坂井　弘紀
和光大学

ナジム・サアッディン・ダウカラエフは，中央アジアの主要民族カラカルパクの代表的な知識人である。幼少から英雄叙事詩や古典文学に親しんだ彼は，カラカルパク口承文芸を本格的に研究した最初のカラカルパク人として知られるとともに，多くの文学作品を著した文学作家，またカザフやカラカルパクの大学や科学アカデミーなどで多くの学生・研究者を育成した教育者としても有名な人物である。

カラカルパク最初の人文学博士でもあるダウカラエフの功績は，「労働赤旗勲章」を授かるなど高く評価されたが，1950年代初めに「反ソビエト的」な「封建主義者」と言われなき非難を受け，失脚したまま死去した。その後，彼の名誉は回復され，現在では科学アカデミーカラカルパク言語・文化研究所にその名を冠している。このような例は，ソ連のさまざまな地域にしばしば見られた事例であり，ソビエト時代の知識人のあり方を考える上で，重要なポイントである。

1　はじめに
2　カラカルパクスタンの歴史
3　ダウカラエフの生涯
4　研究者としてのダウカラエフ
5　文学作家ダウカラエフ
6　教育者としてのダウカラエフ
7　ダウカラエフの晩年
8　おわりに

＊キーワード：中央アジア，カラカルパク，知識人，民族文化，ソビエト

1　はじめに

ナジム・サアッディン・ダウカラエフ（Näjim Däwqaraev 1905-1953）は著名なカラカルパク知識人である。カラカルパク人は，中央アジア，ウズベキスタン共和国西部を占めるカラカルパク地方に居住する民族である。ダウカラエフは，英雄叙事詩を中心としたカラカルパクの口承文芸作品を数多く採録し，それらに関する論考を行なった「最初の」カラカルパク人研究者として知られている。48年の生涯の中で，口承文芸作品の収集と公刊，学術論文の執筆を行いながら，小説や詩を数多く発表し，カラカルパク文学の発展に大きく寄与した。また，カラカルパク語正書法の制定にも関わるなど，現代カラカルパク語の形成にも貢献した。さらに，小学校や中学校の生徒向けにカラカルパク語と文学の教科書を作成し，またヌクス国立教育大学ではカラカルパク文学の講義を行い，多くの教員や研究者を育成した教育者でもある。

2005年，カラカルパクスタンでは彼の生誕百周年が記念され，近年彼に対する再評価が進んでいるが，彼の生涯と功績については，いまだ十分に取り上げられているとはいいがたい。そのため，カラカルパク現代史およびカラカルパク研究界におけるダウカラエフの果たした役割と功績を改めて振り返り，それらを評価し直す必要がある。また，カラカルパク口承文芸研究における彼の業績を改めて整理し直し，再評価することは，中央アジアのテュルク系諸民族の口承文芸研究にとっても有意義なことであろう。さらに，「バイ（bay，富裕層）」の生まれであった彼がオレンブルグやアルマ・アタ（当時）などカラカルパクの外に留学し，カラカルパクの学術的発展に尽力し，研究所所長にまで上り詰めたにもかかわらず非業の晩年を過ごしたことは，ソ連史における人文学者のあり方を考える上でも，きわめて興味深いことである。ソ連では，様々な学術分野で優れた功績を残し，高く評価された研究者が，政策の「きまぐれ」により厳しい処遇を受けることがしばしばあったからである。

これらの問題について具体的に解き明かすための基礎的作業として，今回の報告では，ダウカラエフがどのような人物であったかを中心に，彼の生涯と功績についてまとめてみたい。なお，本論文を作成するにあたっては，種々の文献を利用するとともに，ウズベキスタン科学アカデミー・カラカルパクスタン支部カラカルパク言語・文学研究所（Özbekistan Resupublikasy Ilimler Akademiyasy Qaraqalpaqstan bölim Qaraqalpaq til ham ädebiyat instituty）サルグル・バハディロヴァ所長（Sarygul Baxadyrova）から筆者が2005年に行った聞取り調査の成果や同所長から提供された資料を参考にしている。

2 カラカルパクスタンの歴史

まずカラカルパクスタンの歴史について概観してみよう。カラカルパクスタン共和国は現在，ウズベキスタン共和国に内包されている。独自の憲法や国旗・国章・国歌をもつが，それらはいずれもウズベキスタンのものを「模倣」したもので，ウズベキスタンの法律が適応される国家である。独自の軍隊も通貨もなく，当然外交権ももたない。

カラカルパク人は，伝統的に遊牧を基本とする生活様式を営んできた。その多数は現在，ウズベキスタンに居住するが，彼らの生活様式や言語，文化はウズベク人よりもカザフ人に近い。彼らはロシアへの併合後，トルキスタン総督府の統治を受け，ソビエト政権樹立後，1920年にトルキスタン・ソビエト自治共和国アムダリヤ州に編入された。1924年には，カラカルパク人の民族自治領域として，カザフ・ソビエト自治共和国内にカラカルパク自治州が成立したが，1930年にはロシア連邦直轄の自治州となり，2年後の1932年に自治共和国に昇格する。なお，1930年にカラカルパク自治州がカザフから分離された理由として，カザフの国家規模を抑えることにあったとする指摘がある

（オリヴィエ 2007：35）。

ロシアに編入されたカラカルパクは，1936年12月5日にロシア連邦からウズベク・ソビエト社会主義共和国に帰属を変更され，そのまま50年余り，ウズベク共和国を構成する自治共和国と位置付けられた（To'khliev 2002）。ソ連末期のペレストロイカ期に主権宣言を行って，カラカルパクスタン・ソビエト社会主義共和国となるが，ソ連崩壊によるウズベキスタン共和国の独立にともなって，カラカルパクスタン共和国と改称した。以後，現在までウズベキスタン共和国に包含される共和国という特異な形で，カラカルパクスタンは存在している（以下，独立以後の同国をカラカルパクスタン，独立以前をカラカルパクと表記する）。カラカルパクスタンの憲法はウズベキスタンの憲法に一致するものであり，また国旗や国章もウズベキスタンのそれらと告示している。こうしたことから，欧米から「現地警察官による『閉ざされた地域』」と指摘されることもある（Hanks 2000：941）。ウズベクとカラカルパクとの間に長年の論争があるということ（Gleason 1997：67）を踏まえて[1)]，カラカルパクスタンは今後分離主義が起こりうる地域であるかもしれない（Hanks 2000：942）という見解もあるものの，これまで表立つ目だった独立への動きは見られない。

以上のような状況のため，カラカルパクスタン共和国について，ウズベキスタン国外ではほとんど知られることがないが，カラカルパクスタンは独自にさまざまなアピールを行い，その存在感を示そうとしている。文化的自治のみが認められた同国はカラカルパク文化を軸にその独自性を訴えている。中でも，口承文芸，とくに英雄叙事詩を彼らの伝統文化の主柱ととらえ，これらにまつわる種々の行事を行っている。いくつか例をあげると，1997年には「英雄叙事詩『40人の娘』に関する国際学術会議」が行われ，また2001年には「叙事詩『エディゲ』とその研究に関する国際会議」がそれぞれ首都ヌクスで開かれた（坂井2003：227）。旧ソ連では，このような英雄叙事詩が文化政策の柱として取り上げられることは珍しくはなく，これはカラカルパクスタンにおいても同様であった。こうした叙事詩など口承文芸を主軸に据えたカラカルパクスタンの文化事業の展開は，数多くのカラカルパク口承文芸研究，カラカルパク文学研究の成果に基づくものであるが，ダウカラエフこそがそうした研究活動の嚆矢となった人物なのである。

3 ダウカラエフの生涯

ナジム・ダウカラエフは，第2次世界大戦後30年の間に進展した，革命以前のカラカルパク文学史研究の重要な成果の筆頭としてあげられている（Kamalov, S., et al. 1994：3）。また，カラカルパクスタンで現在，学校教育で用いられている文学教科書では次のように紹介されている。

カラカルパク語，とくに文学について最初にそして緻密に論考し，あらゆるジャンルについて言及した研究者の１人がナジム・ダウカラエフである。彼は文学をよく理解していた。彼は研究者だけでなく，作家でもあった。彼はマクタブ（イスラーム初等学校）を終え，高等教育を受けた。1925年オレンブルグの大学に入学し，1931年に卒業した。その後，何年にもわたって教育に携わった。彼は教師として勤め，カラカルパク文学に関する論文を書き，晩年は研究に没頭した。彼の残した研究業績は高く評価され，1951年には彼に文学博士の学位が与えられた。また彼は多くの文学作品の著者でもあり，『寄宿舎』，『農学者』，『パルチザンたち』，『幸運の労働』などの散文作品や『アルパムス』などの戯曲を書いた。1949年には『幸運の労働』，1955年『撰集』が出版された（Ayjanova, Z. and Allashov, P. 1999：123）。

彼はどのような家に生まれ，どのように成長したのであろうか。この章では，まず彼の生まれたときの状況や幼少期，青年期について押さえておきたい。

ダウカラエフは，1905年10月５日にヒヴァ・ハン国のコングラトのベグが統治するソルコル草原に生まれた。ダウカラエフの祖先は17～18世紀のカラカルパク人エセンゲルディ（Esengerdi）にまでさかのぼれ，代々バイ（bay，富裕層）の家系であったという。彼の父サアッディンは農民であった。ダウカラエフの祖父アッラムベルゲン・ダウカラエフは20世紀はじめのカラカルパクにおけるもっとも富裕な人物とされ，コングラトに綿花精練工場をいくつか所有していた。このため彼はソビエト政権によって目の敵にされてしまう。1921～22年，彼の住まいは強制的に没収され，国家の財産となった。ダウカラエフの父サアッディンはカラカルパクにソビエト政権が樹立されるまで，コングラトに商店を開くなどして，商業に従事するとともに，農業も営んでいた。そのため1928年，ソビエト政権はサアッディンをクラーク（富農）とみなして，家畜や財産を没収し，彼を拘留した。彼は1931年にホジェリにある刑務所において獄死している。ダウカラエフは，ソビエト政権がバイを追放していたにも拘わらず，自身の伝記で自分の生まれがバイであることを正直に認めた。彼は「バイの子供」として，何度もソビエト当局から危険人物として扱われたにも拘わらず，自らの出身に関して事実を語ったという実直な姿勢が現在では肯定的に評価されているという[2)]。

ダウカラエフはまず自分の村のムスタイという名のイシャーン（イスラーム導師）のマクタブで学び始めた。その後，カラカルパク北部コングラトのマドラサにて学ぶ。マドラサではウズベクの著名な詩人ナヴァイーやトルクメンの詩人マグトゥムクルなどの古典文学をよく学んだ。

「若いとき，家にアタムラトという古老がよく遊びにきたものだ」と彼は回想する。「その人は詩人であり，また語り手でもあった。彼はやってくるたびに，我々に歌を歌い，物語を語ってくれたものだ。私は彼から歌を学び，字を覚えてからは，『ユスフとアフマド』や『ゴルグル』，『クズ・ジベク』などの叙事詩を読んだものだった」（Bainiyazov and Bainiyazova 2005：169）。

このような体験がのちに彼が口承文芸研究の道に進む大きな要因となったことは想像にかたくない。叙事詩に関する知識が幼少から豊富であったことは，後年の彼の叙事詩研究に大きく役立ったことであろう。

1924年，カラカルパクのコングラトからタシュケントやオレンブルグ，モスクワなどにダウカラエフを含めた28人の子弟を留学させることが決定された。彼らの親は，1916年の中央アジア大反乱の要因となった強制徴用と同じような徴用なのではないかと，この留学に難色を示した。子供たちの多くは警官に追い立てられて，やむなく留学先に送られたという。ダウカラエフはオレンブルグの大学に入学した（Bainiyazov and Bainiyazova 2005：169）。

ダウカラエフは留学を終えて，カラカルパクに戻ると，1925年10月から翌26年２月まではコングラト管区の行政検査官として，1926年２月15日から８月まではカラカルパク南部のトルトクル州裁判所の記録官として勤務する。その後，1926年から30年までの間にアルマ・アタのカザフ教育大学農業生物学部を卒業し，またさらに1928年から32年までの間にオレンブルグ教育大学のカザフ言語・文学学部で学んだ。彼はカザフ教育大学とオレンブルグ教育大学の２つの大学に同時期に在学していたことになるが，当時はこのような例はそれほど珍しくなかったようである[3)]。こうして，彼の研究者としての人生が始まったのであった。

4　研究者としてのダウカラエフ

ダウカラエフは，繰り返しになるが，カラカルパクの口承文芸研究を最初に本格的に行なった人物である。彼は，カラカルパクのジュラウやバクス（jyrau, baqys，叙事詩の語り手）の流派，彼らのレパートリー，語り手や歌い手・詩人・叙事詩語りなどに関する情報をはじめて学術的に明らかにした。ジュラウについては，この言葉がジュル（jyr，叙事詩）という言葉に由来することを示している（Qosbergenov 1972：369）。口承文芸はカラカルパク文化の中核ともいえる存在で，カラカルパクの口承文芸研究はカラカルパク文化の理解に欠かせないものである。幼少時から叙事詩をふくめ口承文芸に親しんでいたということもあるだろうが，ダウカラエフが口承文芸研究を志したのは，カラカルパク文化を学術的に研究するためには，なによりもまず口承文芸を取り上げなくてはならないと考えたためであろう。

ダウカラエフは，カラカルパク・フォークロアのジャンル区分や分類を学術的に行なった最初の人物でもあり，叙事詩の内容や語り方の分類，叙事詩の形成史に注目し，『アルパムス』，『40人の娘』，『コブラン』などの叙事詩を比較対照し，文学史の視点から研究した。『アルパムス』と『コブラン』に関しては，最初に他の民族のヴァリアントとの比較研究を行い，カラカルパク版の特徴を明示したことが高く評価されている。また，

『40人の娘』は他の民族にはそのヴァリアントがなく，カラカルパクのみに伝わる作品であることをはじめて指摘し，この作品が「古代の母系的社会の時代やアム川流域の歴史の情報を伝える叙事詩」であることを示した[4)]。この点については，果たして母系的社会なるものが具体的に何を指すのか必ずしも明らかではなく，再考の余地もあるが，この叙事詩がアム川流域の人々の歴史認識を反映しているという見解など，現在でも意義深い指摘である。ダウカラエフのカラカルパク口承文芸に関する著作は，カラカルパク口承文芸の歴史理論を示し，今日まで大きな影響を及ぼす著作であることは疑いの余地がない。なお，以下にダウカラエフが行ったカラカルパク口承文芸（カラカルパク・フォークロア）の分類を掲げる。若干の欠点があるものの現在では常識的となっているこうした分類はダウカラエフによるものなのである（Maqsetov 1996：65-66）。

【表１】 カラカルパク・フォークロアの分類

1　抒情的ジャンル
① 歌
歌，アイトゥス，子供の歌，早口言葉，なぞなぞ，宗教的フォークロア
② 儀式的詩歌
子守唄，婚礼歌，挽歌，
③ ことわざ・慣用句

2　叙事的ジャンル
① 昔話
動物昔話，魔法昔話，世間昔話，伝説
② 英雄叙事詩
『コブラン』，『アルパムス』，『40人の娘』など

（Dawqaraev, 1959をもとに筆者作成）

ダウカラエフは自ら多くの口承文芸作品を採録している。その本格的な採録作業は，彼のカザフ留学時代にはじまった。1926年から34年にかけてのカザフ滞在時に，彼は口承文芸作品や文化財採集の調査団に加わり，多くの資料を収集した。この時の経験と採集した資料が彼の口承文芸研究の礎となったのである。その後，ダウカラエフは口承文芸の研究成果を続々と発表する。

1936年には『赤いカラカルパクスタン』紙に「カラカルパクの散文」という論文記事を，『ソビエト教員』紙には「カラカルパクのフォークロア」という記事を書いて，文学とフォークロア学の学術的な扉を開いた。その後も，アヤプベルゲンやベルダクなどのカラカルパクの詩人を取り上げた論文やカラカルパク語・カラカルパク文学についての論文を新聞，雑誌などに発表した。

ダウカラエフは，1939年から，カラカルパク教育人民委員会によって開設された言語・文学部に勤めた。1944年にカラカルパク言語・文学研究所が創設されると，その所長に任命された。この研究所は1947年経済・文化研究所に改組され，ウズベク科学アカ

デミー（現ウズベキスタン科学アカデミー）[5] の一部を構成することとなった。彼は，1944-53年まで，つまり彼の晩年をウズベク科学アカデミーからカラカルパクスタン支部付属経済・文化研究所の所長として過ごしたのである。つまり，ウズベク科学アカデミー・カラカルパクスタン支部は，ダウカラエフが礎を築いた研究機関なのである。同研究所が開かれたころは研究所員も図書館もなく，その困難な状況で彼は研究を始めた。彼は何もないところからすべてをはじめなくてはならなかったのである[6]。

ダウカラエフはそれまでに行なってきた研究の集大成として，1946年『19世紀におけるカラカルパク文学』というタイトルの修士論文を著し，その後，引き続いて博士論文執筆に取りかかる。彼はウズベク科学アカデミーの決定により，2年間モスクワの科学アカデミー東洋学研究所に遊学し，そこで博士論文作成の準備をした。そして彼は2年のうちに，『カラカルパク文学史概説』という博士論文を書き上げた。

彼の博士論文はソ連科学アカデミー東洋学研究所で審査された。ベルテリスやアウエゾフ，バスカコフなどの著名な研究者が審査に加わった。ダウカラエフは，カラカルパクの代表的詩人ベルダク（1827-1900）が民主主義的なヒューマニストであると高く評価し，叙事詩『40人の娘』は「［カラカルパクの叙事詩なかで］もっとも古い叙事詩であることは疑いなく，カラカルパク民族形成の中核となっている」と指摘した。1950年8月9日にはカラカルパク・ソビエト閣僚会議議長ジャパコフの命によって博士論文を931ページのタイプ打ち原稿にまとめあげた。論文は3部構成で，第1部は「フォークロア」（365ページ），第2部は「革命以前のカラカルパク文学」（253ページ），第3部は「カラカルパク・ソビエト文学」（313ページ）となっている。ダウカラエフはこの論文を教育大学などの教材として出版しようと考えていた 。そしてついに1951年2月12日，ソ連科学アカデミー東洋学研究所で博士号が授与される[7]。こうしてカラカルパク人文学の最初の学術博士が誕生したのである。

5 文学作家ダウカラエフ

ダウカラエフは，カラカルパク文学史に残る「偉大な文学者」としての顔ももっている。1930年代は，カラカルパクにおいて，文学界が大きく発展した時期であった。たとえば，カラカルパクの文学組織は1939年には5年前の1934年とくらべて3倍に増えていた（Dosumov 1964：203）。ダウカラエフは，ナズベルゲノフ，ダリバエフ，ジャパコフ，シャムラトフなどと並んで30年代のカラカルパク文学を代表する文学者とされ，その作品は現在も高い評価を得ている（Dosumov 1964：203；Nurmukhamedov 1971：112）。

彼が文学にとくに関心を寄せるようになったのはアルマ・アタ留学の時期のようである。彼自身が，文学に興味を抱くようになった様子について，次のように記している。

アルマ・アタで学んでいるときのことである。大学のそばに図書館があった。授業が終わるとよくその図書館に行ったものだ。手にした新聞を隅から隅まで読んだ。とくに『労働者カザフ』紙には様々な物語や小品が掲載されていた。それらを興味深く読んだ。ある日，ベイイムベトフという作家の作品が載った。読んだ。面白かった。それを何度も読んだものだ。私の文学への関心はこのようにして始まったのだ（Bainiyazov and Bainiyazova 2005：170）。

文学に傾倒した彼は，自ら執筆活動を行い，1928年に「泉」というタイトルの詩を新聞に発表した。翌1929年，現在処女作と見なされている短編「たくさんの日々の一日」を『新しい学校』誌11／12号にて発表した。興味深いことは，この作品がカザフ語で書かれたということである。彼はアルマ・アタ留学中にカザフ語も修得し，たいへん堪能であった。彼のカザフ語方言の知識については，カザフの著名な文学者ムフタル・アウエゾフが驚嘆したほどであったという[8)]。カザフ語とカラカルパク語は，双方ともテュルク諸語のキプチャク語群に分類される，互いによく似た言語であるが，語彙などに異なる点があり，カザフ語を完全に習得するためにそれなりの努力があったものと考えられる。

彼の第２作は1935年に書かれた短編「パルチザン」である。このほかにも30-40年代には，カラカルパクの沙漠を灌漑する人々を描いた詩「新しい運河」をはじめ，「寄宿舎で」，「幸運な労働」（1949年），「ビービハン」（1936年），「祝宴にて」，「勇敢さ」などの作品を書いた。これらの作品は1930～40年代のカラカルパク文学における代表作品となっている。また小説のみならず，歌も作詩し，詩歌「誰がアイシャを知らないか」（1933年）は『赤いカラカルパクスタン』紙に発表された。この作品はロシア語にも訳され，広く知られるようになった。

またダウカラエフは戯曲も書き残している。「ラヴシャン」や「勤労者の心」など，いくつかの戯曲を著したが，代表的な戯曲作品は，1940年，『カラカルパクの文学と芸術』誌（３号）に発表された「アルパミシュ」であろう。この作品は，カラカルパクの英雄叙事詩『アルパミシュ』（カラカルパク語で『アルパムス』）を翻案したものである。『アルパミシュ』は中央アジアの代表的な英雄叙事詩で，カラカルパクにおいても主要な叙事詩作品としてよく知られている。彼が叙事詩をもとに戯曲を著したことは，彼の口承文芸研究者としての側面が強く感じられ，興味深い。この作品は，ヴォルコフによってロシア語に翻訳され，1941年トルトクルで出版された。ダウカラエフは，1942年から44年にかけて，カラカルパク・ソビエト人民委員会芸術部長の任にあり，スタニラフスキー名称国立劇場の総支配人を務めていたが，戯曲『アルパムス』は，まさにこの劇場で1943～44年に公演されている。このように彼は，黎明期にあったカラカルパク演劇の分野においても，大きな足跡を残しているのである。

1938年には，詩人アリシェル・ナヴァイー500年記念祭典に関連して，抒情詩『ファルハドとシーリン』の翻訳を発表した。幼少マクタブで学んで以来，たくさんの古典的

叙事詩作品に親しんでいたダウカラエフは中央アジアの文化遺産である作品の現代語訳の作業にも勤しんだ。さらにダウカラエフは世界各国の様々な作品をカラカルパク語に翻訳し，カラカルパクにおける外国文学の紹介にも大きな働きをした。彼が行った外国文学の紹介は，カラカルパクの人々にとって外国文化の理解の扉になったであろう。

このように，カラカルパク文学史におけるダウカラエフの功績はたいへん大きいものであった。彼の業績と活動は高く評価され，その結果，彼は，1939～42年にはカラカルパク作家同盟書記を，また1946～48年には同作家同盟議長を務めた。彼の文学活動は，作品の執筆のみならず，文学組織の運営と政治活動にまで及んだのである。

6　教育者としてのダウカラエフ

ダウカラエフには，研究者，あるいは文学者とならんで，教育者としての顔があることもまた注目される。

伝統的なカラカルパク社会にはイスラーム式の初等学校（mektep，マクタブ）があり，そこではイスラームの基本的な知識を教えるとともに，先述の15世紀の詩人アリシェル・ナヴァイーなど，中央アジアの伝統的な詩人の作品を教えたり，計算のやり方や地理の知識も身につけさせたりした。しかし，マクタブとそこで学ぶ者の数は，1927～28年にトルトクル管区で76校，1,098人，シュンバイ郷で25校，270人に過ぎなかった（Berdiev, et al. 2003：348）。そうした中，カラカルパクでは，ソビエト政権樹立後1920～30年代に新しいタイプの多くの学校が開設された。そこで勤める教員を育成するために教育大学や教員養成機関が開かれた。たとえば，1925年にトルトクルに最初のソビエト式学校が開かれ，教育法と農業技術，共産主義イデオロギーが教えられた。その後，1934年にはトルトクルにカラカルパクで最初の高等教育機関であるカラカルパク国立教育大学が開設された。トルトクルに最初の学校や大学が開校された理由は，トルトクルは1932年にヌクスに移るまでカラカルパクの首都であり，カラカルパクの中心的な町であったためである（To’khliev 2002：68）。カラカルパク国立教育大学の開学にともない，ダウカラエフは教員として招聘され，ドスモフやアイムベトフなどとともに大学で教鞭を取った。彼は1935～39年には同学の講座長を務めている。1936年に同大学の学生数は336人を数え，1937年に同大学最初の卒業生27人が若い教育者として巣立った。1938／39年の学校教員の数は2,078人となり，1940／41年にはカラカルパク全土に603の学校が開校し，約９万2,000人が学ぶに至った（Berdiev, et al. 2003：349）。

ちなみに，ダウカラエフの教育者としての歩みはカラカルパクで始まったのではない。1934年にトルトクルに教育大学が開設される以前，カラカルパクには大学がなかったため，カザフで教育の仕事に携わっていた。1929年から32年にかけて，彼はカザフのアルマ・アタとコスタナイの教育学技芸学校で，また1932～34年にはウラリスクの教

育学大学でカザフ語およびカザフ文学の教員として勤めている。この時期は，彼自身がカザフスタンの大学で学んでいる時期とも重なり，自らも学びながら，教壇に立っていたのである。

ダウカラエフは，1932年9月30日に，カザフから故郷に戻って働きたい旨，次の要望書を書いて，タシュケントにあるカラカルパク自治共和国常設代表部に送り訴えた。

> 「1928年に私はオレンブルグ教育大学に留学し，同大学を32年8月に卒業しました。現在ウラリスク教育大学で言語と文学を教えていますが，トルトクルに戻ることを望んでおります。カラカルパクで働きたいのですが，大学はそれを許してはくれません。これについて，カラカルパク自治共和国文部人民コミッサール，サドゥッラエフ氏に電報を送り訴えましたが，まだ返事がありません。そのため，私をカラカルパクに招聘していただきたく，またこの件について教育大学学長に働きかけていただきたく，このたび筆をとった次第でございます。ぜひ私にご助力くださいますようお願い申し上げます。ダウカラエフ拝」。
>
> しかしながら，ダウカラエフのこの訴えは，聞き入れてもらえなかった。このため彼は数年間をウラリスクで過ごさざるを得なかったのである（Bainiyazov and Bainiyazova 2005: 170）。

ではなぜダウカラエフのカラカルパクへの帰郷が許されなかったのだろうか。ダウカラエフが要望書を送った相手であるサドゥッラエフは彼をオレンブルグに留学させた人物であった。彼とカラカルパク自治共和国中央委員会委員長であったコプティレウ・ヌルムハンメドフの意向によってダウカラエフは留学したのであるが，ほかならぬ彼らが帰郷を認めなかったのである。その背景には次のような事情があった。ダウカラエフの祖父アッラムベルゲンは，すでに述べたように，コングラトに綿花精練工場をもち，父サアッディンは農園や商店を経営していた。ソビエト政権樹立後の1928年，富農とみなされたサアッディンは逮捕され，1931年に獄死する。ダウカラエフが要望書を送った時期は，まさにそのような時期と重なっていた。当時のカラカルパクが，こうした帰郷しづらい雰囲気を醸し出していたことを考慮して，ダウカラエフの帰郷はしばらく見合わされたのである[9)]。なお，ヌルムハンメドフとサドゥッラエフは1938年の大粛清にまきこまれて，ヌルムハンメドフは銃殺され，サドゥッラエフは獄中で死んだ。

さて，ダウカラエフは大学での教育に平行して，1930年代，学校教育のためのカラカルパク語およびカラカルパク文学の教科書や撰集を書きはじめ，1940年までに10におよぶ学習教材を著した。その主な教材は下記のとおりである。

『文学撰集』（1937年，サギトフとの共著）
『アリッペ』（モスクワ，1938／39年）
『読本』3年生用（1939／40年に3刷）
『文学撰集』3年生用（46年までに6刷[10)]される）

『読本』 4年生用（1936, 38〜40年）
『文学撰集』 4年生用（1935〜39年，41〜44年に6刷）
『文学撰集』 5年生用（1936／37年，39〜40年に4刷）
『カラカルパク語文法』 3／4年生用（モスクワ，1936〜39年に5刷）
『カラカルパク語文法』『統語論』 6／7年生用（モスクワ， 1937〜44年；ヌクス46, 49〜60年代）
『カラカルパク言語・文学カリキュラム』中等教育用（トルトクル，1935年）
『識字力を高める，学校のためのプログラム』（トルトクル，1938年）

この他にも，カラカルパク語やカラカルパク文学を初等教育でどのように教授するかを説いた記事を，『赤いカラカルパクスタン』紙1935年4月21日号，同年7月4日号，『ソビエト教員』紙1937年6月29日号， 1940年39号などの新聞で発表している。彼の著した教科書や教材，教授法に関する論文がカラカルパクの近代教育の発展に寄与したのであった。

また，ダウカラエフはカラカルパク文章語の正書法制定の作業にも関わった。かつてカラカルパク語の表記にはアラビア文字が用いられてきたが， 1928年に32文字からなるラテン文字アルファベットが制定された。この新しいアルファベットは学校教育の場で教えられ， 教材や指導書も出版された。1931年にはカラカルパク自治州で発行されるすべての新聞・雑誌がラテン文字で表記され， 1933年にラテン文字表記の移行が完了したとされる（Berdiev, et al. 2003：349）。

1932年， カラカルパクで最初のカラカルパク語正書法に関する会議が開催された（Dosymbetov and Iusupov 1991：7）。ダウカラエフは， ウバイドゥッラエフやアイウムベトフらとともに，『カラカルパク文章語正書法』（Qaraqalpaq ädebii tilining orfografiyalyq qaghyidalary， 出版地トルトクル， 1938年， 28ページ）を著わした。彼らのまとめた正書法を叩き台として， 1938年10月トルトクルにおいて行なわれた第3回正書法会議では，ロシア文字に基づいた新しいアルファベットと正書法が採択された。この新しいアルファベットは， 1940年7月にカラカルパク自治共和国最高会議幹部会において承認され，今日までカラカルパク語表記に長らく使用されている（Musaev 1973：118-120）。なお， 現在， カラカルパク語はウズベク語表記の再ラテン文字化にともない，ラテン文字による表記が進められているが，現在のウズベク語とカラカルパク語のラテン文字アルファベットは1928年から使われていたものとは異なる。もっとも，学校教育などでラテン文字化は推し進められているが，現実は依然としてキリル文字が主流のままである。

ダウカラエフをはじめとするこの時期の教育者の働きにより，それまで大部分が文盲であったカラカルパク社会は， 1939年には識字率が60パーセントまで高まり， 1941年

には90パーセントに達した地区もあったという（Berdiev, et al. 2003：346）。

ダウカラエフは口承文芸学者として，採録した口承文芸の多くの作品を書籍として刊行し，人々にその豊かさを改めて示した。1949年に出版された『カラカルパク民族の昔話』がその代表作で，それまで口承によって伝えられてきた口碑を文字という新しい形でも提示することに成功したのである。

さて，ダウカラエフは1945年から53年にかけてカラカルパク教育大学言語・文学部助教授であり，同学部長も務めていた。この時期にダウカラエフは教育者として，さらに多くの後進の研究者たちを育て，カラカルパクの学界発展に大きく寄与した。たとえば，1952年８月21日，カマロフやトゥレウムラトフなどのちに著名な研究者として知られる学生たちが，ダウカラエフによってモスクワやレニングラード（当時），タシュケントなどに大学院生として送られた。彼らは歴史や文学，言語，数学，物理学，化学など多岐にわたる学術分野の最初の研究者となった（Bainiyazov and Bainiyazova 2005：169）。その結果，８人の博士，４人のアカデミー会員が生まれたのであるが，これはダウカラエフの尽力なしにはなし得なかったことといわれている。ダウカラエフは初等教育から高等専門教育まで，実に幅広く，カラカルパク教育界に大きく貢献したのである。

7　ダウカラエフの晩年

カラカルパクの「最初の」知識人であるダウカラエフの功績は社会的にも認められ，1944年に学術功労を祝して「ウズベク共和国労働教員」称号を授与された。また大祖国戦争中に行なった労働が評価され，「労働赤旗勲章」が贈られた。こうしてダウカラエフはソビエト政権下で功遂げ，名を成したかに思えたが，その晩年は言われなき批判による屈辱的なものであった。

ダウカラエフにたいする批判の直接のきっかけとなったのは，博士号が授与される前年の1950年に著した「詩人ベルダク」という論文である。ベルダクはカラカルパクを代表する伝統的詩人で，「カラカルパク文学研究においてもっとも研究のなされている詩人」である（Pirnazarov 1998：3）。ベルダク・ガルガバイウルは『シェジレ（系譜）』や『愚かな皇帝』，『アマンゲルディ』などの作品を著し，カラカルパクスタンの首都ヌクスには彼の像がそびえる。ダウカラエフは，ベルダクの生没年や職業，居住地などを明らかにし，現在のベルダク研究の礎を築いた。彼は博士論文でも，「広範なテーマと深い内容で，大衆の生活をモチーフにした作品を芸術的形式に完成させたベルダクは同時代の詩人の中でも卓越した位置にあった」（Davqaraev 1959：171），あるいは「ベルダクの豊かな詩的遺産はカラカルパク人民の文化の最も重要なものである」（Davqaraev 1959：205）とベルダクとその作品を高く賞賛していた。1950年に書かれた論文「詩人

ベルダク」は，のちにウズベク語（『東方の星』（Saharq yulduzi, 1951年１号））とロシア語（『東方の星』（Zvezda vostoka, 1951年１号））で発表された。しかし，この論文が彼の立場を大きく変えることとなる。

1952年３月２日，『ソビエト・カラカルパク』紙に「イデオロギー変質を含む小冊子」という記事が掲載された。記事では，ベルダクの著した「詩人ベルダク」にたいする批判と攻撃がなされた。ベルダクは，『東方の星』誌1953年12号と1954年１／２号に掲載された「カラカルパクの日々から」という記事で，宗教的人物でウラマーやバイ（富者），支配階級にへつらい，彼らを賞賛していたとされ，彼の作品はほとんどすべて人民に敵対する内容であると批判された（Pirnazarov 1998：137）。1952年３月，カラカルパク共産党州委員会において，ウズベク共産党中央委員会第10回大会について討議する集会が行われ，多くの研究者や作家たちが「理想の低い，理想のない」作品や論文を書いたと非難され，そこではダウカラエフもやり玉にあげられた。これらの一連の批判によって，ダウカラエフの生涯は大きく狂わされる。所長を務めていた経済・文化研究所の活動は著しく制限され，彼を取り巻く環境は厳しい状況となり，研究活動をするどころではなく，批判にかかわる会議や弁明書の作成に追われた。研究所の党関連の会議で厳しい批判を受けたが，その批判はその後，引き続き『ソビエト・カラカルパク』紙上にて展開された（1952年11月29日号，1952年４月12日号，1953年２月28日号）。ダウカラエフを「ソビエト政権にたいする敵，ブルジョア・民族主義者，マルクス主義歪曲者」とする記事は，1952年３月だけでも３本，同年だけでも７本も書かれた。ダウカラエフは『ソビエト・カラカルパク』紙の誤りを指摘し，何度も州共産党に釈明をしようとしたが，それらはことごとく無視された。またダウカラエフが『ソビエト大百科事典』に記した項目までもが，彼が執筆したという理由で批判の対象とされた。このような批判を行った者たちは，学術的専門性に疎く，見当違いの的外れな批判であった[11)]。

こうしてダウカラエフは反ソビエト的人物で，「反動的詩人」ベルダクを理想化する封建主義者とされ，「10月革命がカラカルパク社会を停滞させたと考えるブルジョア民族主義者」という烙印を押されたのである。そして，1953年２月19日経済・文化研究所の党組織集会において，ブルジョア・民族主義的誤謬を犯したとして，ダウカラエフを党から除名することが決まった。

さらに批判は研究所自体にまでおよび，研究所が扱ったテーマや財政状況などが徹底的に精査された。同研究所に勤務する同僚たちも，ダウカラエフと同様に何度も厳しく調べられた。14人の研究所所員にたいし，32名が取り調べにあたった。その結果，研究所党書記であったアイムベトフはダウカラエフを擁護したために，党書記の職を解任されてしまったのである（Bainiyazov 2004：145）。

さて，このような叙事詩や叙事詩研究者にたいする「攻撃」は，実は彼の身の回りに起こっただけではない。一連のダウカラエフの攻撃に先駆けて，1952年１月29日に「叙

事詩『アルパミシュ』について」という論文がタシュケントで発行されていた『東方のプラウダ』紙に掲載された。この論文はアルパミシュを具体的かつ明確に攻撃するもので，その後も同様の論文によって，『アルパミシュ』は繰り返し非難された（Paksoy 1989：25）。論文「叙事詩『アルパミシュ』について」は1952年3月の党大会における叙事詩への「攻撃」の礎となったのだが，ダウカラエフを批判する「イデオロギー変質を含む小冊子」という論文はまさにこの論文の模倣にほかならないのである。

なお，叙事詩『アルパミシュ』への「攻撃」は，ウズベクだけでなくカラカルパクでもまったく同様に行なわれ，「カラカルパクの叙事詩アルパムスは人民にとって有害である」という論文で「アルパムスはいかなるときも人民の勇士であったためしがない。彼は歴史上のバイの利益を守り，人民を攻撃する邪悪な特徴をもっている」とされた。このほかにも，『アルパミシュ』や『コブラン』などのカラカルパクの叙事詩は，「封建主義的イデオロギーで書かれた叙事詩である」，あるいは「『アルパミシュ』にはいかなる真実も描かれず，人間的本質や愛を感じることができない」などと批判された。そしてカラカルパク口承文芸や古典文学作品の研究者たちは「ブルジョア思想にある文学を肯定し，賞賛した者たち」として批判された（Bainiyazov 2004：145）。当然，ダウカラエフはその筆頭とされたのである。

このような叙事詩にたいする「攻撃」はウズベクのみならず，他の地域においても行なわれた[12]。キルギス共和国（当時）では，英雄叙事詩『マナス』にたいして，「封建的・教権的イデオロギーに満ちた作品で，ブルジョア民族主義者は，語り手たちに有害な影響を及ぼしている。彼らの語る作品は，パン・トルコ主義，パン・イスラーム主義の思想や未知の敵意ある民族によって汚されている」と厳しい批判がなされた（Abdykarov and Dzhumaliev 1995：94）。こうした「マルクス・レーニン主義世界観と相容れない」民族文化を駆逐するキャンペーンは1951年にはじまった。それは，まず「プラウダ」や「文学新聞」などの新聞記事にはじまり，その後，共産党中央委員会に取り上げられ，次いでさまざまな地方組織，政治・社会組織，学術・文学組織によって討議され，最後に州や地区，町の党組織，コムソモール，科学アカデミー，大学，作家同盟などによって問題化されるという一連のパターンを踏んだことが指摘されている（Paksoy 1989：25）。

理不尽な一連の言われなき批判による失意の中で，ダウカラエフはその生涯をカラカルパクの首都ヌクスで終える。1953年7月20日のことである。48歳であった。

8 おわりに

ダウカラエフの名誉はのちに回復され，1965年にダウカラエフの名は科学アカデミーカラカルパク言語・文学研究所に冠せられ，現在に至っている。彼の著作や原稿は彼が

統括していた同研究所によって出版されたり，保管されたりしている。また彼の名は，同研究所に冠せられるだけでなく，通りや学校などにもつけられている。名誉が回復される以前である1959〜61年にあっても，『カラカルパク文化史論集』が出版されるなど，カラカルパク文化研究に欠かせない存在であった。彼のはじめたカラカルパク文学研究，カラカルパク口承文芸研究は，彼の死後，さらに発展したのであった。

ソ連崩壊にともない，ウズベキスタン共和国が独立し，同時にカラカルパク・ソビエト社会主義自治共和国はカラカルパクスタン共和国として新たな歴史を刻み始めた。先に述べたように，1997年，カラカルパクスタン最初の国際行事である「叙事詩『40人の娘』に関する国際学術会議」が開催された。この会議は，この作品にカラカルパク民族形成の「核」があるとするダウカラエフの考えに依拠したものであったという[13)]。さらに2005年には，ダウカラエフ名称カラカルパク言語・文学研究所において彼の生誕百年が記念された。同研究所内にはダウカラエフの胸像や写真，業績をまとめたパネルなどが展示され，会議や講演会などが行われ，彼の生涯と功績について改めて見つめる必要性が指摘された。近年はダウカラエフに関する論文も増えつつあるようである。

しかし，彼についての「見直し」と再評価の本格的な作業はまだ具体的にはほとんど進んでおらず，それらは，これからの課題となっている。ソビエト時代のカラカルパク知識人の活動や功績を考える上で，ダウカラエフはきわめて示唆的な人物であり，彼の生涯と研究活動については，今後さらに深く掘り下げていく必要があるだろう。

注

1）もっともこの「議論」が具体的にいつなされた，どのようなものなのかは述べられておらず，説得力に欠けることは否めない。二転三転したカラカルパクの帰属を巡る問題であろうか。
2）カラカルパク言語・文学研究所バハディロヴァ所長の指摘による。
3）バイニヤゾフとバイニヤゾヴァは，著名な言語学者バスカコフの例をあげ，類例としている。バスカコフは1925年から30年代にかけて，モスクワ大学民族学部と音楽大学で学んでいる（Bainiyazov and Bainiyazova 2005：170）。
4）バハディロヴァ所長による。
5）ウズベク科学アカデミーは，1943年に創設された。創設時の組織は，11名の正会員，18名の準会員，３名の名誉会員からなり，10の研究所を擁していた。現在のウズベキスタン共和国科学アカデミーは，122名の会員を持つ（2005年）。
6）バハディロヴァ所長による。
7）同上。
8）同上。
9）同上。
10）５刷との指摘もある。
11）バハディロヴァ所長による。
12）同時期（1951年）にサハでは，知識人の世代の重要性を論じた歴史人類学者が，人民を欺く解

釈をしたと非難されている（Takakura 2006：1010）。

13）バハディロヴァ所長の指摘による。

文　献

Abdykarov, T. A. and C. P. Dzhumaliev（Абдыкаров, Джумалиев,）

1995　*Судъба эпоса «Манас» после октября: сборник документов*. Бишкек.

Ayjanova, Z. and Allashov, P.

1999　*Ädebiy oqiw*. No'kis.

Bainiyazov, Q.（Байниязов Қ.）

2004　Қаллы Айымбетов -Белгили илимпаз, жазыўшы, ҳәм жәмийетлик ғайраткер. *Вестник Каракалпакского отделения академии наук республики узбекистон* 5–6: 143–146. Нөкис.

Bainiyazov, Q.（Байниязов Қ.）and Bainiyazova, T. N.（ Байниязова Т., Н.）

2005　Дәўқараевтың өмири ҳәм илимий-дөретиўшилик хызметлери ҳаққында жаңа мағлыўматлар. Нөкис: *Вестник Каракалпакского отделения академии наук республики узбекистон* 3: 169–171.

Berdiev, J., et al.（Бердиев, Жәмийет）

2003　*Қарақалпақстан 19 әсирдиң екинши ярымынан 20 әсирге шекем.* Нөкис: Қарақалпақстан.

Davkaraev, Nazhim（Давкараев, Нажим.）

1959　*Очерки по истории дореволюционной каракалпакской литературы*. Ташкент: Издательство академии наук узбекской ССР.

Dosymbetov, K. and O. Zh. Iusupov（Досымбетов К., Юсупов О. Ж.）

1991　*Қарақалпақстан баспа сөзи*. Нөкис: Қарақалпақстан.

Dosumov, Y. A.（Досумов, Я.М.）

1964　*Очерки истории каракалпакской АССР том 2: 1917–1963гг.*. Ташкент: Издательство академии наук узбекской ССР.

Gleason, G.

1997　*The Central Asian States: Discovering Independence.* Oxford.

Hanks, R.

2000　A Separate Space?: Karakalpak Nationalism and Devolution in Post-Soviet Uzbekistan. *Europe-Asia Studies*. 52（5）: 939–953.

Kamalov, S., et al.（Камалов, С.）

1994　*История каракалпакской литературы: с древнейших времен до 1917 г.*. Ташкент: фан.

オリヴィエ，R.

2007　『現代中央アジア――イスラム，ナショナリズム，石油資源』（白水社文庫クセジュ911）斎藤かぐみ訳，東京：白水社。

Maqsetov, Q.（Мақсетов, Қ.）

1996　*Қарақалпақ халқының көркем аўызеки дөретпелери*. Нөкіс: Билим.

Musaev, K. M.（Мусаев, К. М.）
1973 *Орфографии тюркских литературных языков*. Москва: Наука.
Nurmukhamedov, M. K., T. A. Zhanko, and S. K. Kamalov（Нурмухамедов М. К., Жданко Т. А., Камалов С.К.）
1971 *Каракалпаки*. Ташкент: Фан.
Paksoy. H. B.
1989 *Alpamysh: Central Asian Identity under Russian Rule.* Hartford, Conn.: AACAR Monograph Series.
坂井弘紀
2003 「カラカルパクスタン ── 国家内国家のアイデンティティ」宇山智彦編著『中央アジアを知るための60章』pp. 224-228, 東京：明石書店。
Takakura, H.
2006 Indigenous Intellectuals and Suppressed Russian Anthropology: Sakha Ethnography from the End of the Nineteenth Century to the 1930s. *Current Anthropology* 47（6）: 1009-1016.
To'khliev, N.（Тўхлиев, Н.）
2002 *Ўзбекистон республикаси: Энциклопедик маълумотнома*. Тошкент: Ўзбккистон миллий энциклопедияси давлат илмий нашриети.

付録：ダウカラエフ関連年表

1905年	ヒヴァ・ハン国のソルコル草原コングラトに生まれた。父サアッディンは富農（バイ）
1924年	オレンブルグのカザフ民族教育大学準備科で学ぶ
1925-26年	コングラト管区行政検査官
1926年 2－7 月	トルトクル州裁判所記録官
1926-30年	アルマ・アタ（当時）のカザフ教育大学農業生物学部
(1928-32年)	オレンブルグ大学教育大学カザフ言語・文学学部卒業
1929-32年	アルマ・アタおよびコスタナイの教育学技芸学校勤務
1929年	短編「たくさんの日々の一日」をアルマ・アタにてカザフ語で発表
1931年	父サアッディン獄死
1932-34年	ウラリスク教育学大学在学
1933年	詩『誰がアイシャを知らないか』発表
1934年	カラカルパク自治共和国政府，ウラリスクからトルトクルに呼び戻す
1934-36年	人民教育コミッサール教授法専門家
1935年	短編「パルチザン」発表
1935-39年	トルトクル教育大学講座長
(1939-42年)	カラカルパク作家同盟議長および書記
1938年	ナヴァイー500年記念祭典に関連して，『ファルハドとシーリン』の翻訳発表
1939-42年	カラカルパク作家同盟書記
1940年	戯曲『アルパミシュ』発表（『カラカルパクの文学と芸術』誌 3 号）
1945-53年	教育大学カラカルパク言語・文学部長および同学部助教授
(1946-48年)	カラカルパク作家同盟議長と書記
1946-49年	カラカルパク作家同盟書記
1942-44年	カラカルパク自治共和国人民委員ソビエト所属芸術管理機関長 カラカルパク・ソビエト人民委員会芸術部長およびスタニラフスキー名称劇場の総支配人
1943-44年	演劇『アルパミシュ』，スタニスラフ名称国立劇場で公演
1944年	「ウズベク功労労働教員」称号および「労働赤旗勲章」授与
1943(44?)-53年	カラカルパク言語・文学研究所（ウズベキスタン科学アカデミー，カラカルパク経済・文化研究所所長1947-）
1946年	修士論文『19世紀におけるカラカルパク文学』発表
1950年	博士論文『カラカルパク文学史概説』発表

1950年	論文『詩人ベルダク』発表
1951年２月12日	ソ連科学アカデミー東洋学研究所で博士号授与（カラカルパク最初の人文学博士）
1952年３月２日	「イデオロギー変質を含む小冊子」（『ソビエト・カラカルパク』紙）掲載。『詩人ベルダク』が「理想の低い，理想のない」作品として非難される
1953年２月19日	「ブルジョア・民族主義的誤謬」を犯したとして党から除名
1953年７月20日	ヌクスにて死去（享年48）